

昭和52年5月23日第3種郵便物認可 平成3年5月1日発行 毎月1回1日発行 通巻321号

かもしか

第9回川柳Z賞入賞作品特集



1991.5

No. 321

▽作品 自由吟三千句を十二組。平成三年既発表作品、未発表作品。

▽受賞者の顔ぶれ

- 第一回 細川不凍(当別)
- 第二回 酒谷愛郷(伊万里)
- 第三回 古谷恭一(高知)
- 第四回 西山茶花(岡山)
- 第五回 海地大破(土佐)
- 第六回 桑野晶子(札幌)
- 第七回 金山英子(神戸)
- 第八回 長町一吠(岡山)

第十回川柳Z賞・作品募集あんない

▽選考委員
今野空(白(福島))
大野風(柳(新津))
尾藤三(柳(東京))
吉田健治(東京)
片柳哲郎(横浜)
橋高薫(豊中)

▽用紙 出句専用紙を事務局にお申込みください。返信用封筒を同封ください。専用紙以外にご容赦ください。平成四年一月三十一日消印

▽送付先 切手代用は、千円切手一枚。現金・定額小為替・切手など。千円を同封してください。

▽会費 不要です。発表誌希望者は、千円を同封してください。

▽締切り 平成四年一月三十一日消印

第九回 西条真紀(岡山)

川柳Z賞選考委員会

第九回川柳Z賞・大賞

(賞金 十万円・句集・津軽塗特製楯)

岡山市 西条真紀

細眼にて汝を刺す極刑受くるとも
 汝は花野越えしか以後の沙汰はなし
 万燈や おのが汚れた命いたわる
 病みの果て 一夜二夜は魂あそび
 寒くてならぬ 光れるものはみな纏う
 蜚梅やわが病床ぬくし咲きいそげ
 見つめられ ひらかぬ蕾 重たい不眠
 喪の海にわれも漂う病臥の部屋
 逆光のうすきいのちの身がわりに
 眠りの驕りうす眸のおくを野火疾る
 こぼれ飯 乾いて痛き立秋や
 淋しけり瑠璃の暮色の戻らぬ序曲
 亡母のかぎりのかぎりを焚かむ火の襦袢
 哀歎の闇やわらかし沖の雷
 訪ねれば瑠璃細工師も薄暮のなか

とおい喝采わがひく斜線なおきりら
 海に沖あり人に彼岸のあり見えず
 黄の薔薇を愛しむ瞳よ 遠き沖
 夕野火に佇む童のごとき刻
 冬も開けたり雪のあしたは五十の童女
 浅き眠りのねむり遮る 知命かな
 あすは知らず裸体の青きまま睡る
 おろおると父起き上がる 蓮咲けり
 燦々と生き得る父のあらし息
 屋根低き家の一燈消えるのか
 つまづいて闇に攔まる 父の手に
 斜塔となりて孤影となりて翌なき冬
 落つる日も青野の果ても今際かな
 看取られてみとりて結ぶたて結び
 冬はここに揺り椅子ひとつ揺れつつく

五月号もくじ

第九回川柳Z賞特集

大賞 西条真紀 一

選評 寺尾俊平 細川不凍 二〇

選評 橋高薫風 田口麦彦 二二

選評 大野風柳 尾藤三柳 二四

選評 杉野草兵 片柳哲郎 二六

選評 森中恵美子 福島真澄 二八



西条真紀

かもしか集(247) 三〇
 前号かもしか集鑑賞 宮崎慶子 三六
 北貌集 杉野草兵 三七
 さようなら一寸さん 杉野草兵 四〇
 コーヒータイム 須田尚美 表三
 カット 太田正末
 表紙絵 大湊水源池 菊池時男
 (日本最古のアーチ式ダム)

選考のあとに

- 大賞 18 西条真紀(岡山)
- 準賞 15 佐藤岳俊(岩手)
- 秀逸 13 荻原久美子(東京)
- 秀逸 13 加藤久子(宮城)
- 秀逸 11 情野千里(兵庫)
- 秀逸 10 渡辺和尾(愛知)
- 佳作 8 野沢省悟(青森)
- 佳作 8 石部明(岡山)
- 佳作 7 高橋かづき(兵庫)
- 佳作 7 広瀬ちえみ(宮城)
- 佳作 7 村井見也子(京都)
- 佳作 6 大島洋(北海道)
- 佳作 6 梅崎流青(福岡)
- 佳作 6 板橋映水(宮城)
- 佳作 6 芳賀弥市(宮城)
- 佳作 5 小泉初音(山梨)
- 佳作 5 大西浩嗣(京都)
- 佳作 4 山本磔(京都)
- 佳作 4 山本百子(福岡)
- 佳作 4 山本忠次郎(東京)
- 佳作 4 板東弘子(香川)
- 佳作 4 佐藤みさ子(宮城)

第九回川柳Z賞・準賞

(賞金 一万円)

胆沢町 佐藤 岳 俊

咳ひとつ枯野にひびく雪渡り
 自画像も凍てつきうごく寒の入り
 牡丹雪庄れるいのちから光り
 雪おろし北に生きてる尾髄骨
 小屋高く年輪はかり薪を積む
 一束の葉重ねつつ雪囲い
 長靴も喪服にしみる冬の葬
 冬の水こんこん森の地下を這う
 腐葉土に生きるみみずに触れている
 雪を着る野仏の目も豊かなり
 堆肥掘る長靴の先みそささい
 大賞落ち穂の痛みなど知らず
 ネギの芽が素直に生きる雪の下
 瞳の奥の闇に根雪が降りしきる
 凍土掘る馬の埴輪に会えるまで

糶穀を焼いて宇宙の輪廻など
 廢鶏も夜明けだけ鳴く氷点下
 頬かぶり北の風までまろく吸い
 オリオンの輝く夜を歩いている
 幸不幸しずかに眠る田螺の背
 肺ふかくふかく豊かに雪が降る
 休耕田に並ぶみにくい養菌の列
 杉いっぽん位牌の裏に立つ祖父母
 冬田から呪詛の地吹雪泣き止まず
 豚走る雪の荒野も割れていく
 火を恋いし薪一列に冬の斧
 北国の彼岸墓石を抱き起こす
 夕食の材料根雪ばかり掘り
 鬼の面かぶって闇に米を研ぐ
 冬鳥も黙る軒先吊るし柿

- 佳作 3 坂東 乃里子(兵庫)
- 佳作 3 矢本 大雪(青森)
- 佳作 3 吉見 奈保美(広島)
- 佳作 3 八木 千代(鳥取)
- 佳作 3 普川 素床(千葉)
- 佳作 3 吉田 州花(青森)
- 佳作 3 長井 すみ子(福岡)
- 佳作 2 樋口 由紀子(兵庫)
- 佳作 2 樋口 仁(三重)
- 佳作 2 河瀬 芳子(大阪)
- 佳作 2 柿木 英一(大阪)
- 佳作 2 徳永 政二(滋賀)
- 佳作 2 松永 千秋(福岡)
- 佳作 2 佐藤 幸子(北海道)
- 佳作 2 岩崎 眞里子(青森)
- 佳作 2 松原 葦男(福岡)
- 佳作 1 越川 智慧(石川)
- 佳作 1 尾原 美津子(岡山)
- 佳作 1 吉田 浪(岡山)
- 佳作 1 伊藤 紀子(北海道)
- 佳作 1 海堀 酔月(大阪)
- 佳作 1 山本 乱(福岡)
- 佳作 1 岡崎 徹平(京都)

秀逸 中野区 荻原 久美子

回教寺院かの屋根なき壁を見てゐたり
 天上に紅差し指をわすれきて
 りんだうの細き鎖骨の暮るるとき
 言葉そは宙か寂しき巢か
 しんじつに酔ひたるままの狐火や
 車窓から仮面の刻をもぎとりぬ
 鉄線蓮 喪は水槽に放つべし
 なみだながらの白萩に近づけり
 虹橋の向かうの葦原に籠りゐて

もう鳴らぬ緑の眉やヴィオロンや
 存在の青さに溶ける臍月
 萩ありて聲を女性としてこぼす
 秋草のあはひで時間こぼしけり
 叱られし鮫に深紅の子守唄
 宙に眼の烟りてをりぬ九階草
 水色のあくびもあらむ溺死体
 僧院をときを覗く花ダチュラ
 生きるべき振子の毒やサフランや

秀逸 岩沼市 加藤 久子

レタス裂く窓いっぱい異人船
 向きあつて闇を濃くする五月の椅子
 石のまわりのちぐはぐな音楽だ
 鳥影をかぞえていつも睡り街
 番号に不意に答える私の体温
 少女あやうく輝いている絵の裂け目
 空も陽も欠けて人語を喋る鳥
 意付壊れて湾岸道路埋め尽す
 少年 鯨と消える正午の駅

住宅情報肉は静かに裂かれていて
 卵の闇五月の駅が揺れている
 少しずつ男に話す砂の童話
 だんまりの街すぶすぶと首まで沈む
 少し狂って少し毀れてラジオ体操
 とおい戦争肉屋花屋はぐんぐん太る
 少年が叫ぶと破けてしまう森
 塵紙交換車次々帰る夜の沼
 男にみんな右肩がない風の駅

- 佳作 1 植崎 充代(兵庫)
- 佳作 1 加賀屋 美津子(秋田)
- 佳作 1 後藤 正子(和歌山)
- 佳作 1 大谷 晋一郎(香川)
- 佳作 1 山根 素蛙(岡山)
- 佳作 1 林 荒介(鳥取)
- 佳作 1 勝野 みちお(長野)
- 佳作 1 菊地 俊太郎(東京)
- 佳作 1 稲葉 早恵子(兵庫)
- 佳作 1 松田 京美(熊本)
- 佳作 1 大橋 政良(北海道)
- 佳作 1 佐藤 洋子(北海道)
- 佳作 1 峯 裕見子(滋賀)
- 佳作 1 久保田 美椰(兵庫)
- 佳作 1 竹内 すみ子(鳥根)
- 佳作 1 朝倉 福(福井)
- 佳作 1 上島 みゑ子(京都)
- 佳作 1 井上 明美(千葉)
- 佳作 1 末村 道子(熊本)
- 佳作 1 湯田 ゆみ子(広島)
- 佳作 1 柘植 卓也(愛知)
- 佳作 1 海地 大破(高知)
- 佳作 1 高橋 佐知子(神奈川)
- 佳作 1 加藤 正治(愛知)

秀逸

姫路市 情野千里

豆を煮るすばるは罪の位置にあり
逢わずには死なぬ芋むく手のかゆさ
ココア沸騰 衝動という馬走る
恋の火をかきたてて煮る鶴の肉
硝子の森でぐにやりと曲がる飛び道具
蝶が一匹三匹三匹午後を狭くする
結婚記念日の机の角で割る卵
好色や人より深い土踏ます
見返り美人 一夫一婦を怪しくする

盗むたび男のくちびるは穢
つるバラが地を這う救世主の眠り
馬つなぐ木があり接吻が冥い
発熱の少年を盛るひなの膳
桃太郎とおとつと青く化石する
たけのこの皮ふたたびの裸身かな
紅閨夢 船はデフォルメされている
音楽を吹き消す 浚渫船沈む
蓮根の穴につめこむ夢の部分

秀逸

東浦町 渡辺和尾

秋の絵は燃え君は元気を繰り返し
白い壁にはびこるものよそれは曆
草叢のくさのおいひとさわり
肖像に加筆いとしくかくも狂わん
影絵にはおとこを映し盛んに未来
背骨いたむ 復路の空をまた仰ぎ
糸雨続き 逃げる 避ける 刺す
手の届くところに肉が置いてあり
いのちこれほど夏の花には夏の人

順番に転ぶも愉快よ秋はずかに
揮発剤 ヒト科周辺バラは咲けり
前歴ある 雲の流れはさらに早く
無神論 風は夏秋ひとを寄せず
赤は眩し彼のののひら雨後の町へ
往生など言い置は十五年を経たか
心音をまいにち聞いて迷いながし
梅雨続く死にゆく友人たちの遺言
その夢の一夜なりしもやはりゆめ

佳作 青森市 野沢省悟

羽化直後の蝶の涙を見ては来たが
瞳から群青こぼし 老いゆく鴉
入口がひとつずつ減る飯茶碗
簡単に往生を遂ぐアスパラめ
新緑にガラスの破片 染まらずに去る
なたねづゆ電話回線ことと滾る
修司から夏帽もらい溺れている
人類滅亡の日を知っている醤油差し
枝豆の微笑を食べていいものか

佳作 西宮市 高橋かつき

早春の 見境もなくだす便り
逢いにゆくいつも一輛目の電車
水仙が憎らしいほど咲いている
美しき男の指を櫛がわり
わたくしをまだ許さない水滴よ
まぎれもないいまの私がうつる水
わたくしは空っぽだからただ祈る
さびしさの分だけ散らす桜かな
こわくなる手紙を書くこと返事くる

佳作 和気町 石部明

なんべんもお辞儀している仏壇屋
念仏は地を這い影を食べはじめ
俯せに死の真似すき発光し
わたくしの巨きなてのひら浮く連河
発狂の時こそ青き水こぼす
舌をだすわが胸中の暗い谷
群衆という名のづかづかと咽喉の奥
てのひらにはつ菜の花の黄にまみれ
虚無という木になりたっている夕べ

佳作 仙台市 広瀬ちえみ

火の鳥の卵を抱いているのだが
汽車の音ばかりを聞いている渴き
門を開けてくたさい旅の帽子です
フライパンの中で夢中になっている
浮き袋の空気が漏れているようだ
父を食べ尽くして軽く口をふく
靴跡のついた心を抱いてゆく
海に放してくたさいわたし泳げます
葦はいま情熱だけで立っている

佳作 1 進藤 すぎの (大分)
佳作 1 高田 政旗 (北海道)
佳作 1 米田 芳子 (奈良)
佳作 1 川原 浩和 (神奈川県)
佳作 1 新 正子 (鳥取)
佳作 1 宗村 政己 (北海道)
佳作 1 島田 小吉 (東京)

寺尾俊平選

・特選 情野千里 (姫路)
秀逸 ① 石部 明 (和気)
秀逸 ② 西条 真紀 (岡山)
秀逸 ③ 山本 忠次郎 (東京)
佳作 ① 渡辺 和尾 (東浦)
佳作 ② 高橋 かつき (西宮)
佳作 ③ 樋口 仁 (四日市)
佳作 ④ 柿木 英一 (大東)
佳作 ⑤ 徳永 政二 (守山)
佳作 ⑥ 樋口 由紀子 (姫路)
佳作 ⑦ 八木 千代 (米子)
佳作 ⑧ 佐藤 洋子 (伊達)
佳作 ⑨ 井上 明美 (船橋)
佳作 ⑩ 松永 千秋 (大木)

細川不凍選

・特選 加藤 久子 (岩沼)
秀逸 ① 高橋 かつき (西宮)
秀逸 ② 渡辺 和尾 (東浦)
秀逸 ③ 村井 見也子 (京都)
佳作 ① 八木 千代 (米子)
佳作 ② 石部 明 (和気)
佳作 ③ 吉田 州花 (青森)
佳作 ④ 佐藤 岳俊 (胆沢)
佳作 ⑤ 西条 真紀 (岡山)
佳作 ⑥ 山本 忠次郎 (東京)
佳作 ⑦ 野沢 省悟 (青森)
佳作 ⑧ 長井 すみ子 (福岡)
佳作 ⑨ 荻原 久美子 (東京)
佳作 ⑩ 海地 大破 (土佐)

橋高薫風選

・特選 小泉 初音 (敷島)
秀逸 ① 高橋 かつき (西宮)
秀逸 ② 松本 百子 (福岡)
秀逸 ③ 板橋 映水 (仙台)
佳作 ① 八木 千代 (米子)
佳作 ② 村井 見也子 (京都)

佳作 京都市 村井見也子

薔薇匂う不意の嘆きにおそわれる
人語とは生ぐさきもの花ばたけ
はるの酒しずむ男を見ごろしに
濡れる灯を越えていのちを買いにゆく
裏切りのあまい水飲む木暗がり
降りしきる雨を余罪のせいにして
棘ばかり育つ土壤にしてしまふ
多すぎる比喩をどこまで信じよう
もらい水に頼るえにしがまだ続く

佳作 小樽市 大島 洋

武士道をこっそり海に捨ててくる
胸の奥に醜い鳥を飼っている
電気椅子だけを描く真白い画用紙
いつからか公園への橋壊れている
名前の無い犬が風の中を歩く
昨日と同じ雨降るなまけもの空
故郷に遠く街の煙突が高い
船に似た目を海辺で拾ってくる
空缶が転がっている私のように

佳作 柳川市 梅崎 流青

夜の蜘蛛刺すえんぴつを尖らせよ
みかん剥くゆび裏切りは急ぐべし
橋は木の橋ひとりの街娼をつなぐ
狐火のゆらりと母を誘いにくる
負の部屋で薄刃のような空気が吸う
蝕の月仏具をもっと光らせよ
少し悪事後の後で骨付き肉喰らう
そして今年も水餅のみずにごる
鞭を浴びる象に貫くものがあり

佳作 仙台市 板橋 映水

おすおすと水牢を出る正誤表
行脚十日まだまだ仏にはなれぬ
石ひろう我がてのひらの兵士たち
復讐の日に履く赤い靴を購う
秘密などあるう苦ない朝の粥
産道で塾の案内書をもらう
炎天を戯画の主役になりに行く
酔いざめの水の語録を疑わず
やがてわが骸を包む旗だ見よ

佳作 仙台市 芳賀 弥市

ひとりの布団のためば今日が立ちほだかる
きりきりと残る肋に火を献じ
抽斗へ波うち寄せる離職かな
今生の職を離れて蟹股に
首がぼたりと落ちた椿たいや父た
追いつめられかくて四温の障子越し
鬼が呼んでいるのであろうゆっくり歩く
振り向けば汝 虚血性心疾患
快樂が足らぬ五臓の摩擦音

佳作 敷島町 小泉 初音

父や母や それぞれの箱を振ってみる
恋や哀れに水の流れを 止めんかや
レモン輪切りに そしてあなた足早に
やはり雨に打たるる 日記たどたどしく
透明になりたくて雨に打たれにゆく
激しく笑っ その生きざまや死にざまや
忘れないことひとつ 髪梳く夜
わが双手 小きき傘の中に居る
花は花 実実 現の身が哀し

佳作 京都市 大西 浩嗣

泣いたからこんな軽い歌になる
克つまでの百鬼夜行をみる炉心
所詮身に素つどん以外あわざりき
雑念は昼光色のせいである
死霊多すぎて鶴が降りられぬ
背の翼歌がおわれれば捨てられる
舌出して臓の半分顯示せん
ひき出しの鍵をあけると見える橋
藻塩焼く返事は遠い水平線

佳作 京都市 山本 礫

さよならをしよう 酸素がほしいから
空気を抜く順番が来たようだ
ふり向いても男の証しなんか無い
喉は男で 男になったことがない
定年になった 国訛りになった
表札の父は迂闊な父である
一族ようしる姿を忘れたか
風船をとばす 未練というものを
自己嫌悪 少年の日が歩いてくる

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|-------|----------|-----|---------|-----|----------|-----|----------|-----|------------|-----|----------|-----|----------|-----|----------|-----|-----------|-----|------------|-----|----------|-----|---------|-----|-----------|-----|----------|-----|-----------|-----|----------|-----|------------|----|----------|-------|-----|----------|-----|-----------|-----|----------|-----|-----------|-----|-----------|-----|-----------|-----|----------|-----|----------|-----|----------|
| 特選 | 尾藤三柳選 | 梅崎流青(柳川) | 佳作⑬ | 新正子(米子) | 佳作⑫ | 宗村政己(猿払) | 佳作⑪ | 川原浩和(横浜) | 佳作⑩ | 高橋佐知子(海老名) | 佳作⑨ | 末村道子(熊本) | 佳作⑧ | 峯裕見子(大津) | 佳作⑦ | 松田京美(熊本) | 佳作⑥ | 広瀬ちえみ(仙台) | 佳作⑤ | 加賀屋美津子(秋田) | 佳作④ | 山本乱(大牟田) | 佳作③ | 大島洋(小樽) | 佳作② | 荻原久美子(東京) | 佳作① | 野沢省悟(青森) | 秀逸③ | 吉見奈保美(広島) | 秀逸② | 渡辺和尾(東浦) | 秀逸① | 坂東乃理子(加古川) | 特選 | 佐藤岳俊(胆沢) | 田口麦彦選 | 佳作⑪ | 米田芳子(奈良) | 佳作⑩ | 広瀬ちえみ(仙台) | 佳作⑨ | 梅崎流青(柳川) | 佳作⑧ | 竹内すみこ(松江) | 佳作⑦ | 岩崎眞里子(黒石) | 佳作⑥ | 佐藤みさ子(仙台) | 佳作⑤ | 榎崎充代(神戸) | 佳作④ | 河瀬芳子(高槻) | 佳作③ | 芳賀弥市(仙台) |
|----|-------|----------|-----|---------|-----|----------|-----|----------|-----|------------|-----|----------|-----|----------|-----|----------|-----|-----------|-----|------------|-----|----------|-----|---------|-----|-----------|-----|----------|-----|-----------|-----|----------|-----|------------|----|----------|-------|-----|----------|-----|-----------|-----|----------|-----|-----------|-----|-----------|-----|-----------|-----|----------|-----|----------|-----|----------|

佳作 福岡市 松本 百子

思惟を出て思惟へつくつくつくぼうし
銀色の雨と辻袂合わせかな
あぶり絵の裏のおもての道化たち
虚と実のはさま音楽的である
さまざまな叛乱 冬を妊れる
ひとひとり葬る臆測のなかで
言い淀む処ひぐらし極まれり
葩にまみれまみれて木馬たち
ゆび狐コーンと青い闇を着る

佳作 目黒区 山本忠次郎

誰れも気付かなかった自生の首です
柏手を打つと不純な水が鳴る
虫けらが輝くときははっとする
ひとり時間差音は百八十度
羊水に溶けてしまった血統書
雨垂れが時折り死語を口こもる
よそ者を許していない村の蛇
過労死体夢の雫にうたれている
はき合わせの顔が一斉に笑つ

佳作 加古川市 坂東乃理子

春や春 ひとの不幸をすぐ忘れ
抜き打ちのテストのごとく姑米たる
母強しドアチェーンなどひきちぎる
一家心中 未遂のままに父元氣
春光やわたし十葬にあこがれる
たどりつく鳥のにおいのする家に
眠る私にうつすらとほこり積む
調べねばならぬ花の名男の名
近ごろは敬語が多くなるあなた

佳作 弘前市 矢本 大雪

家系図を焼く稜線がゆれている
雨の浜に描く象形文字さびし
降りしきる皮膚感覚のうえに蠅
あんみつのはなは流言蜚語ばかり
遠雷に泣きたす夜の観覧車
どしゃぶりの底で鯉とみつめあう
デスマスクに似せて潰れた葡萄粒
パン一斤告げたいことのやわらかさ
あなたしか見えない雷雨注意報

佳作 国分寺町 板東 弘子

表札褪せる 日月父の上を往き
芒原をひょうひょうと佇つ父の馬
泡ふたつみつつまどろむ朱の玩具
吊橋をいっぽん断つと銀の鶴
ゆっくりと影から欠ける飯茶碗
葦群れて指を鳴らしている父ら
父の碑に触れる落花のしきりなり
涅槃絵のむこう冬ざればかりある
円空の骨をけずって父に遭う

佳作 仙台市 佐藤みさ子

みづな一株 心臓一個買われゆく
パン皿も指もこんがり焼く痛み
食前に食後に人の瞳をのぞく
名前欲しがる病名も戒名も
思い出したように光るのは夫
父も子も同じ背中をして歩く
水槽の金魚しあわせにしてやれぬ
何ももう産まれぬ家に寝しずまる
わたくしの家のかすかな腐敗臭

佳作 広島市 吉見奈保美

邪になれない恋のふしあわせ
まなざしの濁らぬ男で好きになる
ゆびさが別れきれずに次の駅
泣けるだけ泣いてなおさら好きになる
わたくしがほしいならさらいにきてよ
寂しげな星にあなたの名をつける
君が棲む見知らぬ街のなつかしさ
どの川を渡ればあなたに逢えますか
われは蜜 川のほとりに帰りたいや

佳作 米子市 八木 千代

頭の芯に椿の落ト音がある
樹をいっぽん植える 大きな景になる
問い糺すことあり縦の樹をゆする
おまえは海と池に暗示をかけてやる
鯨も飼える わたしの中の水たまり
長袖で隠す淋しい腕だから
満ち潮のせいか激しい文になる
人を待つ姿に腕を伏せている
銀河見ている 思えば長い夢という

- 秀逸① 広瀬 ちえみ(仙台)
- 秀逸② 加藤 久子(岩沼)
- 秀逸③ 情野 千里(姫路)
- 佳作① 松原 葦男(福岡)
- 佳作② 板東 弘子(国分寺)
- 佳作③ 伊藤 紀子(札幌)
- 佳作④ 海堀 酔月(堺)
- 佳作⑤ 後藤 正子(和歌山)
- 佳作⑥ 菊地 俊太郎(東京)
- 佳作⑦ 柿木 英一(大東)
- 佳作⑧ 普川 素床(市川)
- 佳作⑨ 佐藤 みさ子(仙台)
- 佳作⑩ 加藤 正治(高浜)
- 佳作⑪ 高田 政旗(札幌)

杉野草兵選

- 特選 荻原 久美子(東京)
- 秀逸① 西条 真紀(岡山)
- 秀逸② 情野 千里(姫路)
- 秀逸③ 佐藤 岳俊(胆沢)
- 佳作① 越川 智慧(金沢)
- 佳作② 吉田 浪(岡山)
- 佳作③ 長井 すみ子(福岡)
- 佳作④ 川路 泰山(金谷)

- 佳作⑤ 勝野 みちお(大町)
- 佳作⑥ 稲葉 早恵子(神戸)
- 佳作⑦ 佐藤 幸子(札幌)
- 佳作⑧ 松本 百子(福岡)
- 佳作⑨ 湯田 ゆみ子(広島)
- 佳作⑩ 加藤 久子(岩沼)

片柳哲郎選

- 特選 西条 真紀(岡山)
- 秀逸① 石部 明(和気)
- 秀逸② 佐藤 岳俊(胆沢)
- 秀逸③ 荻原 久美子(東京)
- 佳作① 加藤 久子(岩沼)
- 佳作② 尾原 美津子(岡山)
- 佳作③ 樋口 由紀子(姫路)
- 佳作④ 渡辺 和尾(東浦)
- 佳作⑤ 大谷 晋一郎(高松)
- 佳作⑥ 板東 弘子(国分寺)
- 佳作⑦ 村井 見也子(京都)
- 佳作⑧ 久保田 美椰(神戸)
- 佳作⑨ 佐藤 みさ子(仙台)
- 佳作⑩ 吉田 州花(青森)

森中恵美子選

佳作 市川市 普川 素床

鼻の奥に灯りが見える春は眠い
事件かな春のとれかけてるボタン
牛もおじさんももーと啼くぼくの田舎
くしゃくしゃな空ペンギンが歩いていく
等間隔で空伍が鳴る宿酔
幸福のような南瓜の水びたし
火をつかむ夢の自漬は熱くない
ど・ど・ど・どもりの水深を思う
老年の鞆はあかぬ方がいい

佳作 青森市 吉田 州花

萩野訪うふみ絵幾枚ふみ抜いて
雪を待ついのちの鮮度おちたので
冬野で切った切り絵一枚ほどの暖
おそるおそる持った絵筆のたわわなる赫
ひかりはじめた君描くレモンみつめつつ
海滴らせ心の鎖ためしつづける
飯の世の舞踊会たなブチトマト
とりあえず今はトマトとして熟す
相談はすぐにまとまり魚になる

佳作 四日市市 樋口 仁

確実な高さで表札が熟れる
どこかで撃たれてきた父の背中
弁当を包む昨日の夕焼けで
豊穡な時計と秋の図書館で
走馬燈空腹感が少しある
自由って何ですか目覚し時計様
最終の電車が耳の裏へ着く
軽い春妻が卵を産んでいる
いい夢を見る位置にある炊飯器

佳作 高槻市 河瀬 芳子

序章から錆びた刃を研いでいる
冬薔薇瘦せてゆくのは双乳房
ホロホロと鳥語で交すあなたとわたし
姉が転べばわたしも転ぶおんなみち
鉄棒をくるくる回ってから泣こう
能面へ少し朱のさす悪の兆しか
苦海浄土消えては浮かぶ首いろいろ
子供たちよ家の物語りをしよう
海の好きな君はいつでも大法螺吹きさ

佳作 福岡町 長井すみ子

おぼろ夜のここは一会の通過駅
ふるさとに雪 笹舟は行先不明
胎内の海を宥めてばかりいる
じゃんけんにかけて目かくし罪かくし
氷点におく一まいの遺言書
聞かないで下さい風船のその後
狂わねばこの階段は降りられぬ
ここはどこ紙人形とゆき昏れる
朱の皿に盛れば朱になる縁かな

佳作 姫路市 樋口由紀子

頭上からドミノ倒しの波が来る
複数の鬼が出てゆく夜明け前
エロス漂う 放物線の下あたり
全身で向日葵の首締めている
午後の鳩尾 蝶がたまごを生み落とす
月光に瓶が倒れていきそつた
群青の男の首を二度締める
秋桜のくちびるいろを拒みけり
嘶いてガラスの馬は真二つ

佳作 大東市 柿木 英一

寒月光十字架越える猫を見た
放蕩の街へふわりと飛行船
自画自賛真つすく打てぬ春の釘
ガラス吹きが吹いていたのは暗い戦争
一抜けて風追う胃のなかの切符
死に体に傾く春の自転車
焼跡の蛇口と坂は長かった
樟脳匂う風の向こうの通過駅
死んでゆく日も生まれる前も桐の花

佳作 守山市 徳永 政二

子の影を洗う弁当箱洗う
赤い釘冬のかたちをして眠る
木犀の香りの中を三輪車
ろうそくの芯を見つめているのち
大きな声でけんかのできる家がある
路地にある店の主人は無口です
寝返ってたたみ一畳ほどの夢
もう山に登れぬ父の遠い耳
無量寿の軸を眺めている昼寝

- ・特選 大島 洋 (小樽)
- ・秀逸① 西条 真紀 (岡山)
- ・秀逸② 山本 磔 (京都)
- ・秀逸③ 佐藤 岳俊 (胆沢)
- ・佳作① 村井 見也子 (京都)
- ・佳作② 芳賀 弥市 (仙台)
- ・佳作③ 渡辺 和尾 (東浦)
- ・佳作④ 板東 弘子 (国分寺)
- ・佳作⑤ 野沢 省悟 (青森)
- ・佳作⑥ 広瀬 ちえみ (仙台)
- ・佳作⑦ 樋口 仁 (四日市)
- ・佳作⑧ 上島 みゑ子 (京都)
- ・佳作⑨ 徳永 政二 (守山)
- ・佳作⑩ 進藤 すぎの (大分)

福島 真澄 選

- ・特選 野沢 省悟 (青森)
- ・秀逸① 荻原 久美子 (東京)
- ・秀逸② 西条 真紀 (岡山)
- ・秀逸③ 加藤 久子 (岩沼)
- ・佳作① 広瀬 ちえみ (仙台)
- ・佳作② 石部 明 (和気)
- ・佳作③ 普川 素床 (市川)
- ・佳作④ 村井 見也子 (京都)

- 佳作⑤ 林 幸介 (米子)
- 佳作⑥ 板東 弘子 (国分寺)
- 佳作⑦ 松永 千秋 (大木)
- 佳作⑧ 吉田 州花 (青森)
- 佳作⑨ 佐藤 みさ子 (仙台)
- 佳作⑩ 芳賀 弥市 (仙台)
- 佳作⑪ 渡辺 和尾 (東浦)
- 佳作⑫ 島田 小吉 (東京)
- 佳作⑬ 岩崎 眞里子 (黒石)

第九回川柳Z賞特集号をお届けします。
選考委員からの選稿には応募作品と全手
でぶつかり合っている音が聞こえてくる
ようです。そして、川柳の明日への大き
な期待と熱いおもいが伝わって参ります。
選考委員の方々、二〇〇名余の出句者
作品募集要項を掲載して下さった各誌に
心よりお礼を申し上げます。

ある人は、川柳ブームだと言い、質的
にはむしろ危機だともいう。次回は第十
回になります。多くの柳人の川柳Z賞へ
の挑戦をねがっております。

川柳Z賞選考委員会・事務局

佳作 大木町 松永 千秋

手鏡の中の遙かなさくらさくら
まなうらのとても淋しいさくらの木
硝子片のひとつひとつにある騒ぎ
すでに死は始まっている蝉の羽化
空蟬は悟りのかたち風を抱く
亡母を呼んでいたら花吹雪になった
隅々を白く耕す母の死後
灯をつなぎ水をつないで亡母に会う
風の鳴る夜は黙って風を抱いて寝る

佳作 札幌市 佐藤 幸子

宿命と思わん雑草抜いている
だるまさん笑ったそんなに嬉しいことですか
起床ラップで種も冬眠から覚める
梅 さくら笑い始める鯉はバカ値
暗算が下手で象には追いつけぬ
ギニョル乱心なべて乱心春の風
塩分控えめ少し濃いの春を待つ
憎ひとつ貫きとおす竹の節
誰のにぎり拳か川に墮ちている

佳作 金沢市 越川 智慧

蝶泣く花の芯ならいま開く
花影で男を想う白い賭
愛しいと真実らしき雨が降る
逢うときは妻という名の繭を抱く
黒髪が泣いて祭りは浮き舞台
風小僧雪で晒して来る噂
それ以上切るなと秋の手が髪に
ゆらゆらと帰した夜のきつね雨
垣間見る少し毛深な異星人

佳作 岡山市 尾原美津子

祈らねばならぬひとつにはげしき落花
草の北へ傾くもあり重ね合う
絵がすみや 風のかたちを掌に残し
別れ以後葉裏の蝶の静しせり
花びらと思しき雪を冠に
塔注沓夕べの四肢と憩いたり
瞳の奥の雲の幾重や冬を来て
朔月の白より淡く模索しぬ
漂白の瞳に白蝶を眠らせる

佳作 黒石市 岩崎真里子

うす暮れて影わきあがる恐山
木は空を石は地を恋う無彩色
曇天のたまごに続く砂の道
陽も月も星も消しては去年の風
哀し寂しや化粧地蔵のかぞえ唄
石積みみの石の軽さよ いのち塚
頬寄せて子供地蔵は何を待つ
風を喚む石に鬼面のひとしづく
別界の匂い 過去を連れ歩く

佳作 穎田町 松原 葦男

彼臣花乱れぞくぞく兵士に解る
馬の目牛の目のこの八月の青き疲れ
人の形で死ぬのはいいがただ寒い
河が綺麗になって蛍が消えた
いち族の血の新鮮さ子に託す
いい夢が行方知れずで夜が明ける
誰も遊んでくれない人形の墓地だ
生きたくて冷たい他人の血を貰う
父の寝息よ安らかであれ癌告知

佳作 岡山市 吉田 浪

五感を溶して流れ出る ポエジー
かりそめのゆかしき泡だ 光せよ
発色のゆらめく縄と昏れ悩む
告白にまた茂りゆくあやめぐさ
まっ青なうなじ まっすぐ炎天下
早天の髪ひりひりと沖を恋う
灼きついた玫瑰の景 夏の刑
情念や 女人の脬は苦いらに
人軽し助の奥の冬木立

佳作 札幌市 伊藤 紀子

人の背の正しき位置に雪はふる
まちがい探しの絵に居る冬のタンポポ
吹雪三日を馴じてしまっカイワレ菜
氷柱のびピサの斜塔はまた傾ぐ
雪をかむ菌列たたいしい人の黙
睡ってる麦に袴りを吹いている
母からの水をゆすって軽くなる
水草が茂りはじめる母の家
強霜の惹ひく母にそむけるか

旅 立ち 西条 真紀

永い沈黙を守り続けた蘭が、三年ぶりに花芽をつけ、美しく咲き始めた四月の半ば、Z賞の大賞の知らせを受けました。Z賞への参加は、私にとって一年の総括でもあり、私の足跡でもありました。昨年の準賞、此度の大賞の大きな成果のひとつに、川柳「とまり木」の雑詠欄へ青炎集にめぐり逢えたことがあげられます。

私の川柳初学の頃、「川柳研究」誌に〈途上集〉と言う雑詠欄があり、そこで川柳の基礎と言うべき感動体としての川柳、抒情の大切さ、生の美の痛みの人間回復の詩としての川柳、作家精神の確立などを教わり、それを私の第一章いたしました。

現代川柳の有為な作家が30句の創作で競い合う、厳しい舞台で承認されました。此度の栄誉を誇りに、私の第二章の旅立ちといたします。

都道府県別の参加者数

- 北海道 一四 青森 八 岩手 一〇
- 宮城 一 秋田 二 山形 二
- 福島 二 茨城 三 栃木 〇
- 群馬 四 埼玉 三 千葉 六
- 東京 九 神奈川 七 山梨 一
- 長野 二 新潟 一 富山 三
- 石川 一 福井 一 岐阜 一
- 静岡 一 愛知 八 三重 一
- 滋賀 三 京都 九 大阪 一〇
- 兵庫 一 四 奈良 六 和歌山 四
- 鳥取 五 島根 一 岡山 七
- 広島 三 山口 二 徳島 四
- 香川 四 愛媛 一 高知 四
- 福岡 一 四 佐賀 一 長崎 一
- 熊本 五 大分 一 宮崎 三
- 鹿児島 〇 合計・二二三名

応募用紙は事務局にお申込みくださると専用紙をお送りいたします。そのときは返信用封筒を同封ねがいます。なお、専用紙とワープロ原稿以外の応募はご容赦ください。 川柳Z賞選考委員会

佳作 堺市 海堀 酔月

毛の抜けた尻尾が残るオムニバス
すました顔で南を指している磁石
父の掟を焚いてるあたたかい家庭
おば様の話が豆の木に登る
髭ののびる音がする 耳の中の冬
あれで仲が悪いんです 釘と金槌
枝雀流の擬態で雨を手なづける
東京裁判の角度で日章旗をあげる
自在鉤女は微粒子になれる

佳作 大牟田市 山本 乱

水を飲む音を誰かが聴いている
夢を食べているのだらだと生きている
私と向かい合って私が怖くなる
わらっていたら私のことだった
蟻ひねり潰す私はこんなもの
尽きた火種としばらくの黙考を
焼き捨てるものがこんなに身の内に
叩かれる罪の意識はうすうすある
現身の触れたところが錆になる

佳作 和歌山市 後藤 正子

月が懸かるとてのひらに湧くやさしいもの
酔の匂いわたしを意識してしまふ
悪を感じて悪をゆくり昇ってゆく
五月革命 軒のつばめを見上げている
最善を尽した一房の葡萄
かけがえない哀しみに鶴を折る
葱が育つ母の匂いを遠ざけて
かがり火の花忘れてはならぬこと
辿り着くまでの渴きを視つめよう

佳作 高松市 大谷晋一郎

爪たてる地平に鶴の舞いたつ刻
月明を呑む片肺の貧しかり
牛鬼立つ寒月の夜を懐に
無縁塚の首を拾わばわが死後の
おしくらまんじゅう童子童女の黄なる風
数えるものの春蟬の軀の閃光す
いろはには絵馬散り散りに風孕む
月の暈 花を散らさばわが崖に
人間に還るふところ海があり

佳作 金谷町 川路 泰山

生流転日日に夢かう旅枕
絵踏み影ふみ一人で遊ぶ夕まぐれ
絵馬堂や春の嵐のとどこおる
傲然と言パイを振る占い師
石に臥し雨に打たれし夢うらに
すすり泣 雨は他人のよつに止む
一時は他人の涙も借り衣ぞ
霏して希薄な過去へ止めどなき
限りある道の薄暮へ命乞い

佳作 宇治市 岡崎 徹平

鬼と手をつないで渡る虹の橋
女がおんなでありたいというコント
ふっと鉄の匂い少年が駆け抜けた
地図のない都を捜す天皇旗
そして棚には未完のジグソーパズルたち
戦争をとことん嫌うパンの耳
鬼たちが遊びに来たぞ手を叩こ
とてもまじめに育つわたしの履気楼
宍道湖は生きていたありがたいとうしじみ

佳作 勝央町 山根 素蛙

冬の背を割る教会の彩ガラス
子を殴った手に焦点が合ってくる
霧の記憶の向うで割れた碧い瓶
喪の足袋をやや滑稽に干しておく
背をすこし押されて修飾詞をつける
寶石を飾るひっきりなしの飢え
切口の鋭い首に逢う飯屋
血縁の端でつぶれたバナマ帽
神からの合図はフェントかも知れぬ

佳作 米子市 林 荒介

天に月にんげん池を濁らせる
命乞い山に連らなる水を呑む
時雨して冬の音楽胄に溜る
新しい水を満たして人を待つ
虹に遇う過去も未来も水浸し
一族が掘り起こしている木の根っこ
落陣急ぎとある死後の旗
竹の花人に宴があるように
落ち葉して冬の仏を眠らせる

佳作 神戸市 檜崎 充代

百の鈴ころがす少女期の廊下
いつからか船が近づく夢を見る
髪上げて雨の記憶のない私
葡萄棚背高き人の陰にいて
父の後頭部を触ったことがない
桜散る背中さすってくれますか
安全なところで蛇になっていく
乱反射 ひとに言えない事多し
面白い話も次々に忘れ

佳作 秋田市 加賀屋美津子

嘘ほんと器用に分ける舌のキス
サイダーの泡を聞いている待ちぼうけ
電話切れあなたと私に戻る夜
胸の中「嫉妬」の女偏なぞる
あきらめる心を砕くコール音
さよならのリズム繰り返し窓磨く
落ちる葉を数えあなたをあきらめる
君の中の私を殺してゆく自叙
君が去り2ひく1は0になる

佳作 大町市 勝野みちお

かなしみゆらり冬陽が洩れる森の樹と
クルス一本削りつづけて雪の中
ぼうぼう貧乏しい川と貧しいまま
雪こんこ水子誰の子南無南無と
神さまに逢えるまで掘る雪の丈
峠は霧で明日は明日はと弥陀にもまだ
北限の陰花植物墓地にいかか
塩壺のかなしい指は哭きはせぬ
十八夜や自分探しに疲れての

佳作 文京区 菊地俊太郎

ひょうたんの媚態が少し鼻につく
あんばんの館をほじくる五里霧中
神経科の床にころがるポテトフライ
精算所へ出してしまった顔写真
真夜中の散歩ベーターベンに逢う
つらら一本背中に刺さる旅半ば
音域の狭さを悟る放浪家族
にぎやかな病院のかい灰皿
橋桁を削ってるのはわが一族

佳作 神戸市 稲葉早恵子

夏の朝夢から醒めた夢を見る
遠雷を聞きつつ爪を切っている
ころころと私の中で揺れる石
恋しそう昼行燈の男だから
まだ触れた事のない手をじっと見る
純愛がブームなら乗り遅れまい
逢いたくってはり裂けてゆく白い百合
淋しくて蓮河の匂い嗅いでいる
月光が映すあなたを踏んでみる

佳作 熊本市 松田 京美

百花繚乱京美の部室のおんなたち
開花宣言もう待てないし戻れない
好きになる手紙の中を駆けて行く
手紙一通みるみる百通交えてゆく
きつと火になるそれから先はわからない
速達は速達にする火の返事
直球になるわたしぐんぐん飛んでゆく
もっともっと京美励ますのはわたし
響き合うものが多くて酔っている

佳作 松江市 竹内すみこ

春がくる齒医者に通う裏通り
風に飛ぶ私の帽子追いかける
長靴の奥に小さな石がある
笑つ返じつと我慢をするくるみ
そつ言えば久しくこない長い手紙
犬抱けば犬の匂いのする両手
階段を降りてくるのは誰ですか
同居人仏ひとりと書いておく
仏飯を山盛りにして充たされず

佳作 福井市 朝倉 福

鴉いてすこし明かるい家の裏
その猫師にも撃たずに年を越す
一軒一軒くばって歩く森への切符
夕暮れの柝の葉にまたつまずいた
晴耕雨読雨の降らない日が続く
炎えている蠅姑のたましいあつまって
にんげんも鳴かない蝉も移りゆく
ふるごとく村の木に来る親の祖
母はいまも村一番のきりようよし

佳作 砂川市 大橋 政良

神さまの真似がしたくて昼寝する
キリンの首を見て階段を踏みはずす
山羊の目になったらあご髭をのばす
ものぐさの柩に入れる時刻表
仏壇屋の前で拾った櫛のこと
抵抗に疲れた一かたまりの泡
また影を素足で踏んだことがない
目殻の一つ一つの忌をひろう
好き嫌いはつきりさせて討たれよう

佳作 伊達市 佐藤 洋子

花びらは奇数 残酷とも思ふ
適切な言葉を知らぬ寒椿
何を待ち続けて咲いた薄い赤
汗臭き芒いっぽん枯れ残る
地の底の私へふたつの縄梯子
南風は笑い上戸でちと疲れ
底のない闇がときどき立ちこめる
楽になりたく候ボタン穴
猜疑心ばかりがびえて冬の月

佳作 京都市 上島みゑ子

初春の思いのなかで数珠が寒い
春の水迅しはやしと生きている
菜の花をトントン刻むそれも狂
満開の桜逆立ちしたくなる
現実が転がる自動販売機
散り果てたあとをゆっくりたべている
階段のすりも家族だと思つ
病院もみどりシートの交換日
青梅が木魚の音にまた転ぶ

佳作 船橋市 井上 明美

ヘアピスははずすもう恋などしない
逆光に揺れてるさよならの素指
サンガラス心が透けて見えませうか
離婚届しくじった愛の始末書
悲しくて夏が終わった海泳ぐ
終章は次の物語の序章
蠍座の毒に殺されたい乙女
雪肌と私の肌の白さを比べ
楽譜から音符が墮ちる孤独奏

佳作 大津市 峯 裕見子

ごみの日を忘れていないノラである
百舌ある日おとなになれと鳴きに来る
日溜りで父の背中を搔いている
梅が咲いたのでぬるめの燗をする
乳房もう空っぽ思つままを言つ
ねんころり男をあやす唄が要る
一日に七行書いて冬ごもり
雑巾をかけていのちを光らせる
歌つのはよそつよ父を泣かす曲

佳作 神戸市 久保田美椰

天の川見つめつづけるまたこの世
腕まくら遠い汽笛を聞いている
遠雷や息が重なり合う刻に
髪を梳くいつもあなたに背を向けて
浴槽の水溜 午後はあとわずか
夕焼けを二人で見た日から地獄
約束の日まで生きたし彼岸花
シグナルの青を疑つ初秋かな
十三夜酒盃についた紅を拭く

佳作 熊本市 末村 道子

嬉しくて今朝の鏡が透きとおる
一言が多いわたしを自戒する
老残の愛は空しく白芙蓉
消さねばならぬ想い出ひとつ秋桜
晶子ほどの情熱はなし秋の冷え
ありのまま生きて自然の詩が好き
癩癩をおさえにこにこ金を貯め
振りかえる愛は哀しい絵となって
未来図の構図の中にある死角

佳作 甘日市市 湯田ゆみ子

完全主義者で傷つき易い白を抱く
自信過剰私の皿もこなごなに
レモン齧る肩の辺りの敗北感
こだわりの糸鬱つと自己否定
眼を病んで夢の一つが方知れず
鉛筆ころがる試行錯誤の頁から
たましいが響き合うまで笛を吹く
決断の掌から一そう船が出る
瞋恚燃やす程に深まる蟻地獄

佳作 名古屋市 拓植 卓也

幻想を抱きTOKYOは離陸する
自画像を飛び立ちそうな赤で描く
重い重いとイミテーションの石を抱く
やわらかい嘘であなたを埋め尽くす
酸欠の街でヒト科が人を斬る
自動ドア罪の重さはおわかりか
日の丸をさぶさぶ洗う遠い傷
バーボンの海へいっきに身を投げる
この街の酒にはいつもだまされる

佳作 土佐市 海地 大破

単純な生き方がある力瘤
一枚のいのちも魚もひるがえる
通りゃんせ通してくれたのは鬼か
とても怠惰な一日がある猫の髭
春雷が激しくなって恥部を煮る
菜の花の黄に告白をしてみよう
あじさいに朝の素顔を盗まれる
体温を奪われている梅雨の町
脳天の瓦が少しずつずれる

佳作 海老名市 高橋佐知子

失恋をしても死なないうたくましさ
一日中おんなじ唄をうたっている
上弦の月にあなたと乗りたいな
どうでもいい男を奪い合っている
がんばって美人保っている私
瘦せたいと思う女に落ちぶれる
関西弁がだんだん下手になってゆく
どんぐりを年の数だけ拾いましょ
淋しくて波の音にも振り返る

佳作 高浜市 加藤 正治

老行な右手が本を読んでいる
風が吹く親の恩など数えたり
唇を噛んでずば抜け善人だ
式次第躡く石がおいてある
暗闇で会ってしまった練りわさび
宝右箱に隠れ続けているほくろ
思い出を時々逃がす換気扇
ハイミスへ兵隊こっこ鬼こっこ
朝の窓紙風船も歯を磨く

佳作 大分市 進藤すぎの

花僧の枝に今日も静かに立つ仏
ぬくもりを分けよう妻のしょうが湯
青いウツ青いピカソを観た日から
敵も味方も友だちバカと言われても
稽古してなくて別れが言えなんだ
死に神のゴム輪にもしも当たたら
火を止めて女一瞬はっとする
思ってもあしたの風はもう違っ
叛かない花を男は植えたがる

佳作 札幌市 高田 政旗

百パーセントの死と歩く春夏秋冬
生死の高さ身の内の火花かな
アレルギーの雨 脳天からいのち
目の道を歩く男 背中、女
夢が駆けている長い長い尻尾だ
バスがきたので人間に戻ります
人体図春の患部の二、三ヶ所
六月の噴水 奥歯ランバダ
百田玉は汗かきほとばしる毛穴

佳作 奈良市 米田 芳子

母逝きて五十路の春のたよりなく
喜寿すぎて子離れ出来ぬ母が逝き
夢だからいつもやさしい亡母の声
良い夢は亡母の形見の羽根布団
器量良しこの孫確かに我が血筋
孫が来て泣いて笑って日曜日
作業衣も鎮座まします博物館
へそくりが赤字黒字の舵をとり
車窓にも一幅の絵あり秋の色

佳作 米子市 新 正子

劇はもうはじまっている舞台裏
食べなさい眠りなさいと言っ野心
真剣にわたしに向かう部屋の窓
八つ目の辻がなかなか曲れない
大屋根と繋がっている風見鶏
くやしさを握って幹を太くする
晴れた日のマストに本音干しておく
切り札の一つに水をやっている
エンピツを揃え王手を考える

佳作 世田谷区 島田 小吉

朝刊を取ってまた寝る日曜日
歌聞かすつもり短い祝辞述べ
お互いに亡父に似たなと笑う歳
死亡欄功成り名遂ぐ同世代
老妻の寝息に思っ定年後
ビルが建つ赤提灯を呑み込んで
旅先の亭主電話で水をやり
名刺なき身になりましてと立ち話
よき部下と本音出るまで梯子酒

佳作 横浜市 川原 浩和

真っ青な空に嫉妬をしている朝
重ね着のように不安を身に纏う
新しいスリッパ選ぶ病院で
自分より不幸な人を見る不幸
悪者のような灰皿 待合室
漂える紫煙でさえも上昇す
生き方もスーパライイトに変えようか
自律より自立と思っ失調症
曖昧な会話が続く診察室

佳作 猿払村 宗村 政己

一塊の流水があるわがガラス
ひとひらの雪を重ねる 情死体
地平線生きるため泣く赤ん坊
赤ちゃんこわい話を聞いている
地平線 心がこころ産み落とす
おむつ洗って皿洗って顔洗う
私を洗う力いっぱい洗う
髪洗ううしろ姿に樹が生える
樹のてっぺんで夢の続きを見てる

川柳Z賞・大賞受賞者

- 第一回 八三年 細川 不凍(当別)
- 第二回 八四年 酒谷 愛郷(伊万里)
- 第三回 八五年 古谷 恭一(高知)
- 第四回 八六年 西山 茶花(岡山)
- 第五回 八七年 海地 大破(土佐)
- 第六回 八八年 桑野 晶子(札幌)
- 第七回 八九年 金山 英子(神戸)
- 第八回 九〇年 長町 一吠(岡山)
- 第九回 九一年 西条 真紀(岡山)

小さなちいさな金の粒

寺尾俊平

備前平野をゆったりと流れる吉井川は美しい川であった。清冽な水の流れと白い砂は夏の少年にとって天国みたいな川でもあった。ある日のこと、少年はそのきれいな水の底できらめいている小さなちいさな光るものを見つけた。これは金じゃ、砂金にちがいはない”と信じた。その小さな光る粒は母からもらった千代紙の中に包まれて押入れの上の段の隅にかくされた。少年は大きな財産を持ったと胸をふくらませた。なにか明日がすばらしいものにみえて仕方がなかった。

応募作品を拝見して、ふっと少年の頃のある日のできごとをおもい出した。そして、私たちは今、金をさがしだすのでなくて、金の中からより良質な金を選びだすのだ”など眩やきながらうんざりするような金の粒の山と相對した。

応募作品はきてれつな発想や破天荒な表現

は殆んどみられなかった。どちらかというとおもいを静かに述べようとするような印象を受けたのは若干物足りなかった感じにもなった。日常の生活の中で、たったこれだけしか考えないのか、考えられないのか。にんげんとは勝手なもので、異常なものに拒絶反応を強くしめすのに、”無いものねだり”の習癖がついそうしたことを感じさせるのかもわからない。

入選した方の作品を一句ずつ抄出する。

豆を煮るすばるは罪の位置にあり 情野千里
 白昼にひっそりひらく蝶凶鑑 石部 明
 逆光のうすきいのちの身がわりに 西条貞紀
 下町を行く足裏の粘着感 山本忠次郎
 背骨いたむ復路の空をまた仰ぎ 渡辺和尾
 美しき男の指を櫛がわり 高橋かづき
 ずうーっと前から枕は橋だった 樋口 仁
 焼跡の蛇口と坂は長かった 柿木英一
 弟がくると言うので風呂洗う 徳水政二

身の隅に画鋏をとめたまま愛す 樋口由紀子
 頭の芯に椿の落音がある 八木千代
 一本の煙草と長いこと話す 佐藤洋子
 しみる青別れの新鮮な空気 井上明美
 誇らかに病死と書いて眠りたし 松永千秋
 特選・秀逸作品の順位づけでは相当に迷った。作品の中味より順位の点差が大きすぎる感じがしてならなかった。賞の決定基準としての採点は必要なものであるが、どうもこのあたりの感じがしっくりとこなかったことは事実である。

川柳の中のおもいについて語り合ったことがある。各人各様のおもいをそれぞれ申し立てるのであるが、結論めいたものは得られなかった。つまり、おもいとは第三者の入る余地のない自分だけの世界だという、あやふやな課題になってしまった。選後の胸の中にもやもやしたものが私のおもいである。

たいせつに隠していた金の粒を持っている気持ちに耐えられなくなった私は友人にそれを見せた。「これは上流の礦山の硫化鉄の粉じや」私の一つの夢が粉々に散った。

主題性のある句を

細川不凍

昨年に引き続き応募者全員の膨大な作品と向かい合った。予選のない分、どうしても観念に走りすぎて自分を見失なった句、散文の断片を投げ出したような韻文精神欠如の句あるいはまた気の利いたことさえ書いていれば事足りりといったような句が目についた。これらは、一次選をすることで僕の手から離れていったが、やはり作家は、詠わずにいられず詠ったというような主題性のある句が書けなければと思った。特にZ賞の場合は応募句数が三十句ということで、一貫した作者の心の姿勢が見えなければ、選者の心を捉えるまでには至らないのだ。

選を重ねること数度、疲労困憊の果てに次の諸氏を得た。

- ・特選)加藤久子
- ・住宅情報肉は静かに裂かれていて
- ・男にみんな右肩がない風の駅
- ・とおい戦争肉屋花屋はぐんぐん太る

社会や日常に対する作者の怜惻で鋭い視線には、女性作者特有の甘さを払拭したりゴリズムの覚醒がある。また、危機意識をファクターとした批評精神と詩精神の巧みに融和した作品からは、作者の練達した表現技術を看取することが出来た。「とおい戦争」の句、湾岸戦争(とは限らないが)に対する日本社会の有り様がイロニーたっぷり描かれていて面白かった。

秀逸①)高橋かづき

- ・妹のように駅まで送られる
- ・わたくしのポブラと思ひふり仰ぐ
- ・女性作品にありがちなベタツキもなく、気自わずに淡々と書く作者である。その書かれた内実からは、作者の生き生きとしたナイーヴな心が見えていい。

秀逸②)渡辺和尾

- ・草叢のくさのおいのひとざわり
- ・往生など言い置は十五年を経たか

川柳という短詩形の中で濾過された抒情を、睨と身につけている作家である。日常の自分の心の動きを起点とした抒情的表白からは、作者の生死への思惟がしみじみと伝わる。

秀逸③)村井見也子

- ・降りしきる雨を余罪のせいにして
- ・もらい水に頼るえにしがまだ続く
- ・相変わらずの氣息の柔らかさである。作風は地味だが、句のうしろにある人生感深沈として胸に韻く。豊かな人生経験に裏打ちされた滋味のある句に、作者の特長が窺われる。

佳作十名

- ・佳作に推した諸氏も、個性とポリシーをもって、自己の作品世界を形成していた。
- ・しがらみも帯も仏のはからいか 千代
- ・虚無という木になりたっているタベ 明
- ・おそれざん夢のひとはみだらにて 州花
- ・凍十掘る馬の埴輪に会えるまで 岳俊
- ・あすは知らず裸体の青きまま睡る 真紀
- ・常識の網が要所に張ってある 忠次郎
- ・買って来たスルメを逃がす天の川 省悟
- ・ここまでは夢ここからは手を汚す すみ子
- ・水色のあくびもあらむ瀕死体 久美子
- ・一枚のいのちも魚もひるがえる 大破

虎の子渡し

橘 高 薫 風

今年も総体に暖かい冬だったが何べんも風邪を引いた。冬が暖かいのも風邪を引くのも原因があるからだろう。大阪の春は春場所から明ける。今日からはじまる場所を、さて優勝者は誰かと予想を立ててはみても、それは予想に過ぎず甚だ心もとない。大阪場所は荒れると言われるから尚更である。荒れるのも原因はあるのだろうが、莫とした優勝者も終ってしまえば当然の結果と思える。Z賞の多数の応募句に接して、先ずは大阪場所の勝者を見極めるのと同じに莫莫とした思いにかられた。しかし、結果は出る。竜安寺の石庭「虎の児渡し」のように、白砂の中から十五の石が現れ出たのである。

さびしさの分だけ散らす桜かな
片想い五月のいちようみつめおり
助手席で女優のようにする化粧
この作者の感性にはいつもながら感心する。その淡色透明感、酸素の多い空気のよう
に私の呼吸を安定させる。五月のいちようの
ような個性である。
高橋 かつき
一言で言う「未完成の魅力」をこの作者
に感じた。マイナス面は内容の甘い句、表現
ちぐはぐな句のあることだが、ひたすらさが
良い。

ナンバーワンは小泉初音さん。私の存じ上げていない人なので、また、年若い作者なので喜ばしく思った。Z賞がすでに出来上った作家の盟回し的受賞であるよりも、新進への銭、小説界の芥川賞的存在であればさわやか

数が一次選で残るのは私が非力であるか、作家のレベルが高いかのどちらかであるが、私は私自身を信じて後者であると決した。特選一編 秀逸三編は結果的には芥川賞、直木賞が相半ばした。

かなしびはあぶらえのぐの句いにも
わたくしを掬いあげねば水鏡
一句一句の句柄や、その背筋の通った力感
は上位一者よりもむしろ優れている。新子・
俊平らと同期の桜を自称している私に近い世
代なので、句の構成に親しみ深いものを感じ
る。
板橋 映水
産道で塾の案内書をもらう
採用の通知と首輪とが届く
心雪図これがわたしの折れた矢か
叙情を身上としていた私は、叙情句には厳
しい眼を向ける一方、社会批判の句に高い評
価を惜しまない。叙情と批判を川柳の二つの
軌道と信じているからである。
佳作入選に奈良市の米田芳子さんを加えた
のは、日常の生活の中から採集された句の真
執さと、丁寧な字から推量出来る応募への心
構えに打たれるものがあつたからで、高度な
作品を指す作家意識の充実した群像の中に
この作者のような応募者の増えるのも、Z賞
にとって意義のあることと思える。
優に二百を越すZ賞の応募者に深い感慨を
覚えた。

芥川賞の視点で

田 口 麦 彦

二百十三名の作家、六三九〇句の作品との対峙は覚悟の上であったが、一番悩んだのは芥川賞（新人作家の発掘で行くか直木賞（新進・中堅作家の顕彰）で行くかということであった。

Z賞も九回目、川柳界の作家賞として定着した感があるが一つしかない賞であるだけに両方の目的を同時に満足させることは非常に難かしい。過去八回の選挙結果から見ると直木賞の性格を帯びているように思うが、これは質の違うものを同時に選ぶためであらう。このままでは川柳の億万智は永久に出てこないのではという危惧から私は今回、芥川賞重点に選んばせていただいた。

私の選挙基準は「写生」「簡明」「批評性」の三つである。写生は現代を実感として切り取ることで、簡明はリズム・伝達力のあること、批評性は批評精神が根底にあることとして選をすすめ一次選では一〇七編が残った。過半

数が一次選で残るのは私が非力であるか、作家のレベルが高いかのどちらかであるが、私は私自身を信じて後者であると決した。特選一編 秀逸三編は結果的には芥川賞、直木賞が相半ばした。

特選 佐藤 岳俊
大嘗祭落ち穂の痛みなど知らず
凍土掘る馬の埴輪に会えるまで
休耕田に並ぶみにくい義歯の列
写生、簡明、批評性の私の三要素にピッタリ一致した作家として推す。

秀逸 坂東乃理子
本日は多忙と伝え昼寝する
死んでゆく者に鼓隊が遠さかる
恋やせん顔に畳のあと付けて
不思議な魅力を持つ作家である。近ごろ少なくなつたユーモアとペーソスがある。
秀逸 渡辺 和尾

影絵にはおとこを映し盛んに未来
手の届くところに肉が置いてあり
ファクス受信 六月の水生苦しい
未発表新作をたずさえての果敢な挑戦。
失敗を怖れぬものに不透明な現代が見える。
秀逸 吉見奈保美
わたくしがほしいならさらいにきてよ
夜書いた手紙は夜に読まれたし
悦んで墮ちてゆきたい崖っぷち
二十代、三十代作家の応募が多かったのがうれしい。その代表選手としての登場。

佳作に選んだ作家から一句ずつ。
簡単に往生を遂ぐアスパラめ 野沢 省悟
りんどうの細き鎖骨の暮るとき荻原久美子
空缶がころがっている私のように 大島 洋
水を飲む音を誰かが聴いている 山本 乱
君が去り2ひく1は0になる 加賀屋美津子
瓶の中の残り時間を振ってみる 広瀬ちえみ
速達は速達にする火の返事 松田 京美
お留守ですか奥でテレビの音がする 峯裕見子
野麦峠の垢切れの手は見たくない 末村道子
わたくしの都合で桜見ない春 高橋佐知子
重ね着のように不安を身に纏う 川原 浩和
両替機 砂漠の音を聞いている 宗村 政己

あなたにはドラマがある筈

大野風柳

六三〇句という膨大な作品群と、まさに対決したと言つてよい。しかも一人三〇句を一組として審査するには、ひとりひとりの作家を擧げなければならぬ。誰でも三〇句の中には数句くらい力を抜いた作品がある。それはひとつの休憩でもあり、遊びでもあろう。遊びは逆に三〇句全体を盛り上げるために大切な要素でもある。

集った中から優れた作品を選ぶことはたやすいことである。しかし、三〇句の中から作家を擧げ、ドラマを探すことは実にむづかしい。

Z賞の主旨について、審査に当る十氏がもう少し共通の認識を持たねばならぬのではないだろうか。

全体を通して言えることは、「る止め」の作品が多かったこと。三〇句の中で半分以上も「る止め」を使った作家が多かった。

また、Z賞を意識してか（意識することは

当然であるが）力みすぎ自己を見失った人

「軽み」の作品に取り組み息が切れてしまっ

た人、限られた語彙の中で苦しんでいる人、

他人任せが強く自己主張が薄い人、十七音字に戻ることができぬせに破調を持って遊んでいる人、三十句に全く遊びがなくひとつの型に収まっている人……などなどいろいろあった。

川柳が詩でなければならぬとか、川柳は文

学だなどを論ずる前に、もっともと自己を詠うことが大切だと気付くべきである。結果として詩性がともなうて来るものであろう。

限られた人選作家に入り込むことは至難である。入賞作家になれなかったが強く心をゆさぶった作品が多かった。このまま活字にならず消え去ることが忍びず多くの人から鑑賞していただきたく次に掲載させて貰う。

寂しさに郵便受を二度のぞく 古賀 創平

異種の世界を推す — Z章選評 — 尾藤三柳

本年度応募作家の通しナンバーは二二五、欠番四点を除いて作品数は六三三〇章——本賞がいよいよ輝きある存在として日本川柳界に根をおろしたことを心から喜ぶたい。

作品を通過しての総体的な感想は、前年度と変わりなく、現代川柳が比較的水位の高い部分で、刻一刻とへ既成化しつつあるという実感は、依然として残る。

喜びよりは悲しみ、満足よりは虚しさ、逢うよりは別れ、晴れよりは雨、大通りよりは小径、衆よりは孤独——などなどのほうが、詩的雰囲気似合うことはわかるが、その間に個の垣根がなく、ひたすらのっぺりと均らされた風景ばかりが続くと、いい加減へキエキしたくなるし、また、

とてもまじめに……

とても大事に……

とても怠惰な……

とてもきれいな……

こんな言い方や、「視つめよう」「浮かべよう」「見にいこう」「信じよう」「抱かれ

よう」「始めよう」「続けよう」「飲みほそう」「討たれよう」「見ていよう」「蛾になろう」「絵にしよう」「引越そう」「していよう」「してみよう」「しておこう」「どうしよう」「……から翔ぼう」「……から死のう」——こんなパターンからもそろそろ脱け出さないと、既成化は否応なく進む。流行語ほど早く古くなるというのは、至言である。誤字の多いのも相変わらずで、せっかくの料理を欠けた器に盛るようなもったいない例を、少しだけ掲げておこう。

「ひとிரい旨い」↓「ひとしお（二人）」の
ことか、「結果跌座」↓「結脚跌坐」、「吸穀」↓「吸穀」、「掌を一本」↓この場合は「手」（てのひらは一本といわない）、「粉れた」↓「紛れた」、「仏壇」↓「仏壇」、「散えた」↓「消えた」の書き誤りか、「コミニユティ」↓「コミニユティ」:etc. いつもブツブツ言っているようだが、それというのも、ここに集まる作家及び作品の水準や価値をじゅうぶん認識したうえで、だか

海に放して下さいわたし泳げます 広瀬ちえみ
恋やせん顔に畳のあと付けて 坂東乃里子
平均台のまん中へんに床をとる 海堀 酔月
花びらは性善説で直下する 樋口由紀子
ジャンケンのグーを開いてみたとも 井上信子
また飛ばさない竹とんぼを持っている 大島洋

マイナスの答しかな濡れた傘 樋口 仁
鯛焼きの尻尾に期待しすぎたな 玉利三重子
だいこんの花もたたかわねばならぬ 山本乱
青麦のキュンキュンと自己主張 富永紗智子
森はパイオルガンだった神父は木靴 石橋水絵
単純な生き方がある力瘤 海地 大破

逃げのびて来て烏賊の目を噛みたく 菊地俊太郎
正装になれば野鳥は寄りつかず 庄子 喜一
水色のあくびもあらん弱死体 荻原久美子
鈍器には花粉がからみついている 石部 明
少し狂って少し毀れてラジオ体操 加藤久子
よそ者を許していない村の蛇 山本忠次郎
百花繚乱京美の部屋のおんなたち 松田京美
夕食の材料根雪ばかり掘り 佐藤 岳俊
花になつと雪をひとひらずつ食べる 野沢省悟
時計は時計できれいな話ばかりする 勝野みちお
吹雪三日を馴じんでしまふカイル菜 伊藤紀子
消しゴムも私もまもなくなくなりすぎた 村井見也子

らこそ敢えての苦言とご理解いただきたい。

さて、銚衝については、まず私なりに現代川柳の水準点を仮定し、それを分水嶺として二二二作品を振り分けた結果、五七作家（男二九、女一八）を得た。これは、全体の水準の高さを裏つけるものといつてよい。

次には、細部にこだわらつ、この中の約三分の一、二〇作家（男八、女一二）に絞ったが、規定にはなお数点を落とさなければならぬ。例年のことながら、この段階がいちばん際どく、苦しい。以後は、作品の個性により重点を置いて、辛い作業を続けた。

三〇章をひとつの世界とみなすとき、個性が強い作家ほど、成功と不成功の落差が避け難く同居し、いわば作品密度にバラツキが目立つが、そうした作品世界の破綻を表面化させず、なおかつ個性を打ち出した一五作家の中から、梅崎流青氏を推すことにした。

「橋は木の橋」「少し悪事の」など、発想・律調ともにユニークで、新しい異種の世界を感じさせる。僅かではあるが、マイナス面を指摘すれば、文語系列や命令形の多用にステレオタイプの尻尾が垣間見える点であろうがそれも、今後への可能性と見ておきたい。

苦闘を終えて

——年齢を忘れずに——
杉野草兵

六千句。時間と神経をすりへらす大変な作業である。選者の方々本当にありがとうございます。苦闘の中で選者の目にとまり、一点をとるだけでも大変だと、つくづく作者の側に立ってしまふ。二百名を越える応募事務局に代わってお礼申し上げます。なお、お願いを一つ。年齢を書き忘れた人が数名おられます。作品のほかに・男女の別・年齢は、よりの確な鑑賞に最低必要ですので、忘れて損をなさらないようにお願い致します。

一席、荻原久美子作品。「回教寺院かの屋根なき壁を見てゐたり」に始まり「永き夜のほうたる水となりけり」に終わる三十章。全くのめり込まされてしまった。文語体・切字・旧かなを駆使して、『異郷の民のやうに』へ見事な流れを作っている。感服してしまつた。川柳は俳句に較べ、抽象的・観念的なために、喋り過ぎに成り勝ちで、句意が流れて

しまつ。俳句は、文語・切字・季語の中に想いを「包み込む」。我々は口語体で調子を整えるあまり想いを「吐き」出してしまつてはいないだろうか。もっと想いを「物」に定着させなくては、と考えている。

それをZ賞応募作家、選者の方々が実行に移し、実を結ばせつつあると思う。Z賞作家や入賞者の作品を見ると、その事がお解り頂けるかと思う。そういう視点から、今年も迷わず一席を決めさせて頂いた。只、これからの若い人は、文語体・旧かなには馴染めない。口語体・新かなで、ハイレベルの作品をとやはり望みたい。

稲葉早恵子さん。二十八歳の綺麗な目にもうしても一点さし上げたかった。大会用の観念的な句に走らぬよう、よろしくね。

最後に、Z切りの日まで、捨てがたく僕を悩ませた作家の作品を一句ずつ記してお礼と致します。

遠景の芝の緑やみな他人 尾原美津子
 情念やもみじの朱の馬走らす 西川けんじ
 壁は善 父のかたちで横たわる 倉本 朝世
 まだ女朱いお腕に海を盛る 進藤すぎの
 髪洗うしる姿に樹が生える 宗村 政巳
 逃げのびて来て鳥賊の目を噛みくだく

菊地俊太郎
 水滴に次々死者の顔生まれ 海地 大破
 はぎあわせの顔が一斉に笑つ 山本忠次郎
 透明ないのちが溜まる水呑み場 板東 弘子
 抱かれない親父の海が涸れている 富安清風子
 私刑始まる妻の手にあるアルミ缶 芳賀弥市
 虎落笛妹を売り酒を賣つ 嘉瀬信柳子
 秒針はあわてて僕を越えてゆく 北村 泰章
 島の井戸 秋の魚と竹売りと 大谷晋一郎
 月明けに 震える狂う紙の馬 吉田三千子
 不意に白桃熟れて聖書重くなる 加藤かずこ
 じょうじょうと横笛おとこねむらせる

来住タカ子
 かざぐるま 時の狭間を咲きつめる 岩崎眞里子

免罪のひとつやふたつ茄子の馬 吉田 州花
 羽化直後の蝶の涙を見ては来たが 野沢直悟
 平成三年三月十日

ある選後感

片柳哲郎

僕の川柳への愛は、単なる十七首への信仰につながるものではない。人間の宿命としてもつべき或る飢渴と欠落に対する愛であるかも知れない。それを満たし得るのは川柳の周辺以外にはないと思ひさだめたのである。これは短歌にも俳句にも、また現代詩にもその間隙の無いことを知つたうえでのことであつた。現代の川柳の周辺を持つ空間で現代の作家たちが何を満たしたか、何を託そうとしたか、それがZ賞選考における僕の基準の一端であつた。だがその応募作品の中で驚くほど氾濫する「罪」の高揚は、意識というよりは礼讃であつて、まさに辟易するほどであつたし、「地獄好き」は川柳界の脱皮できぬ安易構成に結合しているかに僕には思へた。

西条真紀氏の30句は、何故作品化しなればならなかつたかが、深い訴えをもつて迫つて来るし、純粹な魂で一步一歩生きてゆこうとする生命の讃歌があつた。その視野は昨年

度同様に狭いものであつたが、創らざるを得ないという切実な祈りがあり、一読清冽なものが胸に充ちひろがってくる。何よりも創作上での欺瞞の姿勢がないのが特筆されよう。確かに西条真紀は川柳という私性文学に縛つて救われようとしていたのだと思われた。

石部 明氏の一連は、ある種の情念に染まつたイメージが、飛躍できる限度内でモンタージュされてフェティシユのようにこの作家を取り巻いているかに思へた。このような構造をもつた作品群は応募作品のなかでも希有なもので、「不思議な白昼」を持っている作家だと思ふ。それでいて特殊用語の助けを借りず平易な口語で鑑賞者の背後にある蓬の門を訪うている。しかも残滓の汚れを見せず、この作家の夕闇に消えてゆくのであつた。

佐藤岳俊氏の作品たちは土の匂いと温みがある面白い連作の姿をもつていた。通常の悲愴性を排し寒村の中に風物詩的叙法を採り、

土に生きる人間がその風土と豊かに調和して輝いている。軽い技法は読者の呼吸とマッチして波長を作り健康的にその挿し絵の中へ読者を引き込む。つまりこの作家独自の周辺が躍動して歌っているのである。

荻原久美子氏の作品は、新しいスタイルの新しい抒情を成立させ注目しに値した。その抒情性は通常逃がさぬように枠の内部で閉うべきものを、枠の外へイメージの転調と共に開放している。従つて視野が大きく、乱暴であるが大胆な変革が品格を損ねずに展つてゆく。しかもシャレた叙法が伸びやかに快適なリズムをもつて、さながら鑑賞者を待っているかの如くであつた。

加藤久子氏はまことに上手にまとめた一連を提供された。この作家は格別迫力ある主張の固守はないのだが、作品のもつ即物主義的傾向が面白く、樋口由紀子さんは心から創作することの喜びを持っている作家だと思つた。もっと一句を大切にして欲しいと言つ感慨が残つたが、読ませるすべを心得た一連であつた。尾原美津子氏は作品の品格と思ひの転化が無理なく調和し、異物感のない句語の採用は読者のもつ「想ひ」と共鳴するであらう。

わがままな時間

森中 恵美子

昨年につづいて二度目のZ賞。累々と積まれた作品の中から、早く抜け出ようとすのだが出口が見当らぬ。

作家各自、一年を通しての集大成となった作品のすべてに、作者の持つ自信のほどがうかがえて圧倒されるばかりである。

回を重ねて九回目、この賞も年々エスカレートされてゆくだろう。全国的にも大きな話題のひとつでもある。(功罪をふくめて)

定着する発展をよるこびながら、いつもの幕が、いつものように開く。そしていつもの舞台が終るものであってはならないだろう。

二〇〇名に余る作品を選外に置く選考過程に寒さがつきまとったものだ。

人間の行動の中で許される「わがまま」とどうにも我慢のならぬものがある。

川柳にもあっていい筈だ。川柳を大きくゆすぶる快よい「わがまま」なら持ってもいいのではないかと、しきりに思っ近頃である。

大島 洋 作品

武士道をこっそり海に捨ててくる空缶が転がっている私のように

貧しい風が吹く海からも山からも

洋作品に流れるものはもつと異質だと思っていたが、一句、一句鎖くことが出来た。

「異端を怖るるなかれ」と叫ぶ作者が思いを押し込んで表現する静かな叫びであろうか。川柳界へ、選考へのあきらめか、そうではないやわらかな一個の抵抗であるとみた。

西条 真紀 作品

寒くてならぬ光れるものはみな纏う

海に沖あり人に彼岸のあり見えぬ

屋根低き家の一燈消えるのか

真紀作品の持つ近寄りがたい独特の表現に触れてはならぬという思いを持ちつづけて来たが、思わず、深く近づいてしまった。「魂」を書くことばに云々など出来ぬ。

山本 礫 作品

空気を抜く順番が来たようだ

ふり向いても男の証しなんか無い

一〇センチ程肩を落して秋にいる

礫作品には無理がない。ふところを深くのぞかせず、さりげない意を持つ。欠点を見せまいとする人間の弱さに共感させられる。

佐藤 岳俊 作品

咳ひとつ枯野にひびく雪渡り

雪おろし北に生きてる尾髄骨

肺ふかくふかく豊かに雪が降る

岳俊作品から雪のもつ句いと、男の存在感を知る。上手に表現するより何を書くかに刻をかけているだろう。素材であたたかい。

村井見也子作品につづく佳作群の「今」を書く強さを知ることが出来た。作品一句、一句を選ぶのでなく、三〇句が持つ作家の姿勢とわがままな時間を持たせていただいた。

「知らないのは恥でない。知ろうとしないのは恥になる」と教えられている。知ろうとする時間を、これほど多く要するものは、Z賞以外にはないだろう。

対称化と体現化

福島 真澄

特選 野沢省悟

産声だけが眼裏にある冬母

瞳は閉じるため輝いて真冬の樹

啼きはらしにんじんのあかぐつぐつ煮られ

残雪に蝶の尻をさがしに 行く

羽化直後の蝶の涙を見ては来たが

亡き嬰兒への哀別の思いを、まるで赤い蠟

燭を点しながら、春また浅い蝶の原へと、耳

底に残る泣き声を伝いながら行き、雪の残る

狭間に足をとられて、倒れ込んでいくような

挽歌は、蝶のイメージと共に、哀切である。

フレーズが内面化し、作者の思念が思惟

実存へと移行してゆく境が、ここにはある。

秀 逸① 荻原 久美子

言葉そは宙か寂しき臍か

秋草のあわいで時間こぼしけり

生きるべき振子の毒やサフランや

久美子作品の機知性は、対きを変えた美意識だと感得してから、何年経つか。狩りも鎌

金も抱えてみながら、句の空間に屈折点を打ち初めたのは、そう遠い日ではない。諸諸のモチーフを傾けながら、美や美という酒にか

かわってゆくととき、誰れの句より重くなく、

彫り上げた型式は、急速に洗練してゆく。

秀 逸② 西条 真紀

冬はここに揺り椅子ひとつ揺れつづく

寒くてならぬ 光れるものはみな纏う

こぼれ飯 乾いて痛き立秋や

心に風が吹くと書いた詩人は沢山いるが、

光れるものはみな纏うと、内意を深めながら、その風を転調の起点として成句とした

例は、そつ多いと思えない。この句を他の誌

上で再度目にしたが、その都度、内面から明

るむ光量が、増したかに覚える。この句に続

くと見るへこぼれ飯の句には、すでに思念

の切り変わりがあり、それを印象とした。

秀 逸③ 加藤 久子

レタス裂く窓いっぱいの異人船

少女あやしく輝いている絵の裂け目

凍連河喉に溢れるもの殺す

最終選考で、久子作品は11句の選出で、更にそこから右3句を抄出転記した。選評に幾許かの追尋や分析を試みたが、裂けたレタスの二重性、異人船とのモンタージュ、へ凍運河への伏在している視界やその語句の暗示力等等の、迷路や行き止まりから、何回も後戻りをした。そのような繰り返しのなかで、クリムトやエゴン・シーレ、ムンクたちの画像が、二物衝撃の深い裂け目や、レタスのレタスグリーンのにどりで見え隠れする。

追記

今回の応募作の、生き生きと、気の利いた

機知性や風刺、そしてユーモアなどの作者が、

その半数以上女性なのが、何とも愉しい。

前衛はやはり、心理や、心象表現に在ると確

信する。心象表現の幻想句は、ルドンの幻想

画にいつか重なるが、その幻想句より、作者

の現実や現実感、心理表現の、信仰に近い

喻化技法と共に、遙かに遠くに在ると、今回

は思っばかりである。

挽歌は、フレーズを対称化できない。例外

はあるにせよ、それは体現化にとどまる。